



萬寶古狀獮文鑑
 完



萬原忠文鑑



源義經の
好者の義
兄弟の
御中不和を
あつて吉野
を薩北國
ふらむ
茲に富樫
左衛門新國を興て
主従を止む武藏坊へ
南都廬舎那佛建立
の進を解富樫并慶
比英雄大智を
感と花物
贈主
後と

秋川直政画

五節句之事

夫前白との次年中
に春の小あありその
そののかりめをもちり
とのふり前とのふへ
二也年中のそのふ
てたし久ハ竹のふの
ごとく又日く不時刻
のあつていふまの



歳且

今日方後討思息
仲秋制病條々
一不知文道有武家終
一不勝物事
一好鶴鷹有海遠三毛益
一樂教信事

一 正月と二月とのち
 して正月とのち上を
 天よりちのちあふ
 ちのちあふちのちあふ
 ちのちあふちのちあふ
 又正月朔日とのちをし
 て元日とのちあふちのち
 ちのちあふちのちあふ
 とちのちあふちのちあふ
 ちのちあふちのちあふ



初卯詣

一 不辨良不 松悪不
 一 正清良不事
 一 我知能下 德善又
 一 云心何 亦事平
 一 全色机 亦在 德令
 一 然樂 亦事平

一 正月元日とのちを
 ちのちあふちのちあふ
 東方朔の占昏とのち
 のちあふちのちあふ
 二日を大と一 二日を猪
 と一 四日を羊とし 六日
 を牛とし 六日を馬と
 一 七日を入の日とのち
 け祝ふちのちあふちのち
 ちのちあふちのちあふ



草 七 雜

一 失但人 理美 以 德善
 一 務格 威事
 一 不知 亦 有限 或色
 一 台武 亦 不 事平
 一 嫌 亦 良 不 事平
 一 汝 亦 亦 亦 事平

六月六日の夜七日の
 曉あけふすりと本庵ほんあん下したせら
 ついのたぐい食用じようようの品
 七ななつをあめあめておまおまえ
 むむつ方かたよりむむまま
 すすつつこのこのひひにに
 わわつつふふ時とき紀きといい
 昏くろふふ月つき七日なな日ひ鬼おに車くるま馬うま
 ここううのの世よををくくののななままひ
 ををけけ一いち血ちををままくくららす



一 此乃身元之無面也
 一 酒宴於具勝
 一 有忘家賊事
 一 述已利根然為
 一 指約他人事

血ちののままくくののまま
 いいののありありととふふ日ひ
 のの夜よ七日なな日ひののああるる日ひ
 門かどををたたくくてていいちちをを
 おおととろろじじししてて入いるる
 ととののいいけけししららををいいてて着きるる
 衣いののむむくくすすととるる
 ○七日なな日ひをを解とけけてて
 七なな種しゆ粥じゆくををいいるる神かみ
 武む天てん皇わうののちちろろりり也



胤いん提ていび

一 人來則構虛病
 一 不能對面事
 一 好獨味不能施
 一 人至限居事
 一 武具衣裝已過分
 一 面使不...

己を除日とて不祥
 を除くのむより己の日
 の禊としてけ日もちひを
 するにありき後の具
 小賤物として紙を人形
 をつくりてを紙と名
 づく又母子ともひらの
 人形をのりて母とま
 子をるて水のちりて
 あはれをまをひま



己の日
 禊

葉削己の釣想空然の想
 一種者有と推想念君也且君又
 原不考乃食食良味味味味味
 由秋此族福福福福福福福福
 指以物物物物物物物物物物
 但古金金金金金金金金金金

今のひのまあそびは
 を表したる男女の
 紙雛を用ひて大層
 笑をらんてをりつ
 浜成りの所ありあり
 ぬる人の紙雛ひの
 作る所のまにあま
 為代の上の方の紙
 ちりてあまのつら
 ちりてあまのつら



紙千代

君を人形日然第其意
 春秋通流流流流流流流流
 旨思思思思思思思思思思
 結結結結結結結結結結
 木葉葉葉葉葉葉葉葉葉葉
 為散流流流流流流流流流流

五月六日を端午と
 するは月もまじめ
 の午の日を利ひるを
 候ふ日と云ふは
 るりさまごとの唱を
 改めすてやまら
 年のその白とひひ日
 粽さりのよしの法陽



不播交武家
 礼智信一願
 者無人
 速其
 不
 要也

おつとて敷せさる
 陽の舟ホしてまら
 陸生むる月もま
 をのふと正候を
 柏舟白あかき
 ちてかいつく
 て後不衣
 由八男子の程
 るまむせくね



乃不
 疾
 臣
 依
 況
 柏

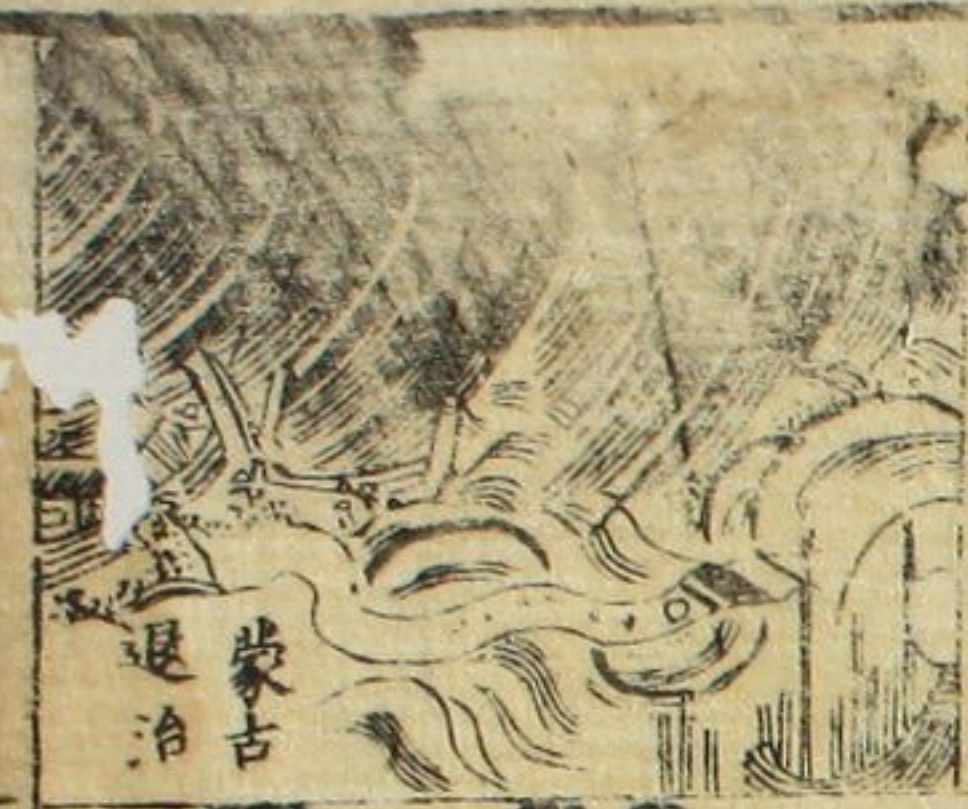
打蒲草



をうごころとすまふり
又け日るを蒲草を打
小やうの物をもねん
の物るの蒲草を酒
小ひこして是をのこす
酒ふりあひひはま
とてあをけて酒を
あふかるとは酒を
さすまふひをを保
このはゆりの日男

情はあはれもの海軍の海軍
承宣元年九月十日
初登山島為教訓者
在命辭よふ命命感
故の初心に思ふ心
為武を戦場は通る

るあまの心かたをたて
曹ノ形を色紙のひき
蒲草とてかたをいひ
人は十九代光仁天皇
の四月天皇の戒面の海
へ紙をよきて日のかま
まろさんとせし小舟二
の王も早良親王を大
事として六月八月
をいひて夫紙をせし



蒙古
退治

理道依命と紫雲其類
机の紙も打たれ
子息を立上るは
三人は命を賜ふ
故はこれに本
承宣元年九月十日

五
狀

一、トをねえのむらす
 成務すといりをも
 乞巧奠といふこの
 まりの成武丁より
 せいまるとあり又を
 たうのふあをいそく
 りのうけをうのしを
 糸あて針のめと糸
 をあてるとのめれの
 うまあてしものといふ



星のひそ
 針めをを通す

六、ハの世おとし
 まるるとるの日本あて
 ハ天平初七年年より
 おしまりて禁中す
 初のうこ本相の
 國史ともあふく
 その像ありわりの
 男女も梶の葉よた
 ちをうたふくは向か
 とるり又は日素翻



一、キの氣能の
 腰越状

腰越状

源義経心志平上三義経有
 櫻市は信其乃初自身乃使總
 軟弱心何若痛用合結心
 摩之病也信實乃思乃使虎滑

喜松は葉尖太動切我健死
 疾往の切切若松乃切氣
 之間沈切切若葉手之食
 葉若是若葉身之食因食
 乃以松若葉若葉乃食食
 回不健若葉若葉乃食食

一と統日本紀不
 又く又又又又又
 日菊の酒をの
 命を地をとの
 夜のせよあま
 昔月の鏡玉の
 王のまをを



菊花欄

忽徒復為の道討年家之族令上
 淫を令山深致本當為其力
 責傾率以公附敵致不實蹟
 馬力致不顧之令或附之漢大
 沈漢風の難人酒院乃海夜
 樹枝の難難難難難難難難

つまよりにて山へ移ら
 世菊の流の水をの
 て年月をかくり七
 女の姿をたもち
 ともしつゝあま
 いくるるあま世の
 羨望とるつけり
 久りそりあま日
 の影の鬼の肩とて
 お入して欣ハ不祥を



菊見童

可箭基基名守之併欲然何已
 魂群快外也由軍制我徑必
 補以女信厨本高回家之面目
 希付仁重職律軍如來為以今
 照源物也通因於以諸も病之
 酒年之露家東種野心為是

らひ病をまるとは
 ぬふるへう又も
 の人九月九日
 持ひて酒を飲
 香山会といふ
 詩文をよむ事
 又たりその
 なるぬるる
 とのふお相景
 のあり貴長坊



菊酒

菊酒日本國中
 神祇其乃
 不意神祀
 廣念和氣
 吾必神德

考こがひて
 びけるふ
 序植家
 年の九月九日
 るんぢる
 災害あり
 止んと
 のかりて
 栴色れ
 の美を

茶黄



茶黄
 進上因幡守殿

古犬

下とをへけきそ
 桓景そのどくせしお
 牙ふりきりひまぐさ
 その夕々家おゆり
 てつせの中ひあは
 たふ犬と鶴ころぐ
 く庭へて居りけ
 本をよき成おわたり
 けむはこせ汝が命
 わかりたるなりと



義徳會狀
 後白河院義徳未だ幼穉に
 悉從從多由御侍家以來
 終令盛為極也至遠國
 安民百姓の益國の運
 孫の勲官に成り御侍に

以り於る統系緒
 記小をくろこのる
 るふるひてとこの
 代を九月九日小
 ちあ半ハ大内ゆても
 着しより吉例に
 こまを茶葉葉と
 ひふ又ひし九月九日
 中も雜多ありあり
 をのちれひりといふ



或時漫池と波國波籍切
 故道有藤線觀心者實歷三
 二月此其身は捕在信教公家
 深倉泊名深氏名好能解後
 原深倉正史類心集大初初
 或初初也初初初初初初初

さきと二月ふくく
てんまつりやうま
あつそつりしとぞ
江戸あくも天和の
年間まへはの雑
をまつりしやゆとる
くこまて今ふ二月
まつりあつりしとぞ
ありぬ



菊の
造り物

存將又似感不世業園深
 但提兼人今預後存回在義經
 不有入生海世眼乃後安
 雅盡業業紙志増教智
 文法業園月日義經
 進上源右長備佐友

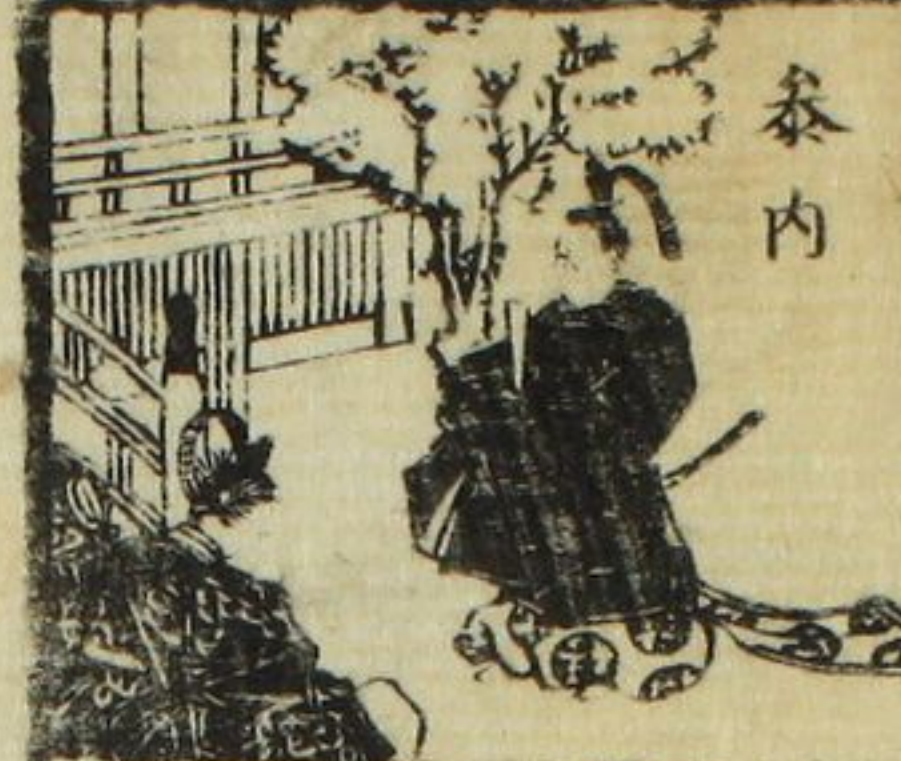
八月節分故事

八月朔日を八節と
 して後ふるありと世の
 多和由のわさき
 む後とくきとけり
 其れはまじめは後海
 院のまじりしつせ
 多のりし時通方
 のに結せ八月を



西塔式蔵坊辨慶
 密期書捨之一通
 柳君年時内身在常例
 山月量秘味本念目夜相濟
 唯二字況公利余後後比偏
 向空本念誠道進於密秘

世のひまひまよりその
 吹のとり所僅ふつう
 せむひーやあつひふ
 此吉例とるりしエー
 公事根元抄ふえん
 あり或の深草帝の
 西と記ふそとすを
 のひか衆の長明ケに
 愛物終ふ小松帝の
 け附とるんより此日を



泰内

法杖入建所種者保操合願最
 興藏不自是下法法空初秋自出
 母胎世民來不化其藏金液法考之
 道彼望相道因一在法法中更重
 宿報難過更令將果者欲富法瑞
 願法天將軍來生年所清濁

田面の長白とも田の
 実の赤白とも又
 秋の節白とも云
 秋の田を統まら
 秋の田の實
 のふちむ田面代
 のひまひ田面代
 とのひ又秋の實のり
 を流して田れ実の
 なる白とのひ又秋の



實田

實其相若者都人條瑞
 乙夜の思業計斬因因空
 巨正の馬家起勝負以速
 以俗格色後夜集乃公更天
 衆存身清法能其家集
 皆存身若虎孔法眼合信其能



挽むるるり是を添
 うんたぬのつぎるる
 はんみふくをりて一
 命をつまくりの推
 又二日を祝つて止へ
 き勝ふ大せらの弁
 包こころをるる
 秋ふりておく小
 津社の多れあるも
 望み殺成物のとを



是を又ても田の面
 花白のいもさば
 らん世一の長白ハ
 人の身不害をうへ
 少後一八相の殺不
 善るううんた免不
 いづ世ものいもさ
 式も之法人こそを
 命ハ一又この日白
 惟るを用ふるのハ

兼野軍軍不物欲已責伏
 飲迷在貴氣祝成海運楫
 眼迷有言親必命國實所
 不松有柳海禱儀為知如
 霜化巧歌女不痛の何得
 雲乃貌况不味運音杜者
 運志

刺背軍團是難安余未流
 程才和入條池小流以合
 瀉財公分在頃格刑八
 王士魂流未其流秋若因
 野藏塔塔初塔表後奉の
 物津園某向初塔の表武乃

占大



又由又傍也中由
 其のとりぬるは
 一のとりぬるは
 と此をり
 そのあつあつさふも
 見えしりみる大千日
 のしをりぬ大鳴る
 一年の突和して是
 をめてこくこあらあ
 たる平日のむけふ
 棋抄

然故客道は経年経遠御座望
 死徳成運舟御身不報徳を
 上因信地家奉吊中置在者也
 空實中伏実香海因雲其徳也
 空運可必海有以徳也
 誠恐徳書



その心くけと武
 武雲を為す百姓
 町人かまなく此
 ことくをををく
 くつとむべうの
 よふあふお日の
 手あはつさひを
 のそきさ福ひを
 りくた交種長身
 羊
 市

壽在三年二月自丹海實
 進上信宿家由以徳有
 候徳也
 今月七月十日初谷
 死骸送送給送給
 谷送海海以不書運命



熊谷次所及

大垣進狀

今者乃行相重宗家教
 惟意國之同公制地
 籠賦之用其國公制地
 秀賴亦不知石田公制地

梅	百	雲	山	木	香	結	猪	鈴	机	犬	乘	能	猪	猪
首	舌	雀	雀	卷	雞	雞	豕	羊	猪	牛	靴	羊	鏡	虎
鷄	香	家	鷄	豕	鷄	豕	豕	猪	猪	猪	猪	猪	猪	猪
鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄	鷄

送心其河進國酒法國集不後
 時月越上濃川多野合戰切
 勝頗小國西堂北排法集集
 本堂公之生捕石田法法安國
 寺公法及系都石石公法之心
 辱其刻可討集是公于天南

木	和	和	和	見	和	和	和	和	和
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和



以殊為極者有之回也原也
 作之遠遠也人企謀報也
 家如漢之東報也一城也
 唐學感陽也流為新羅也
 及上陣者神時踏流秀也
 首事之不可也理以名漢之

角	未	王	子	和	和	和	和	和	和
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和



慶長十九年
 大野日守
 同返狀
 秀運會抄見也河原城能及
 一取津守也結全大園秀
 不願矣公也後者日本國

一竹をわきま
 こそふ小刀をて
 をあり対より後
 漢の代糸考と云
 人紙をつり毛剪
 とり人筆を振り
 て紙筆あて来り
 つしととより鹿
 の代より板ふあり
 てんやまくなるこ



曾我進状
 今月廿八日夜に宿所を野に傳
 沖陣に討たれり能く討つる
 御謀略御勢御力御徳御意
 秀段御討つ御徳御國御命
 實為御勲御業御長御方御徳御勢

あをを棒ふり
 とりの棒ハ本此
 王なるがよれ本此
 利ゆるとのり
 さむか物をもまされ
 ば万のふふし
 くらけはバふふ
 すとつるすつ
 てあふ

筆結



依れ殊殊甚く内記状金見小部
 舎並御陣同命書有全園通
 時且空名進由由仍執事出許
 建之雲本有時日全書時
 勇我上能友
 同進状

上右を度ふも文字
 多くて纏を結んで
 一を結ぶ香の
 結を結んで文字を結
 文字六書八体とて
 多けむとこそおもて
 八のつと一の字をや
 つ一天皇のらゑを
 四十七多とほし平と
 名村弘法大師なり
 王序なるの右徳大
 のりもめらむしるり
 いろははるれさ
 いろはをづらさくやらの
 もれをづらりいろはを
 いろはとさくやいろ

本晦日本教書令日百集
 権相見は結集押山次郎権相
 等古事山次郎家次権相
 乃心格別以使者有言
 御所坊流人三回不叙
 不叙進以世有能言
 御所坊流人三回不叙
 乃心格別以使者有言
 御所坊流人三回不叙
 不叙進以世有能言



いろは山びり
 山の井のいろは
 いろはのいろ
 いろはをいろは
 いろはいろはいろは
 いろはのいろはいろは
 いろはいろはいろは

天保十六年乙巳正月再刊
 安政三年丙辰正月再刊
 錦森堂 森屋治兵衛板
 いろは山びり
 山の井のいろは
 いろはのいろ
 いろはをいろは
 いろはいろはいろは
 いろはのいろはいろは
 いろはいろはいろは

天保十六年乙巳正月再刊
 安政三年丙辰正月再刊
 錦森堂 森屋治兵衛板

